

第2章 コスタリカにおける民主主義の価値判断 近隣諸国との比較

著者	久松 佳彰
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジ研選書
シリーズ番号	36
雑誌名	岐路に立つコスタリカ：新自由主義か社会民主主義か
ページ	61-76
発行年	2014
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00016813

第2章

コスタリカにおける民主主義の価値判断 —— 近隣諸国との比較 ——

久松 佳彰



サンホセ市北西20kmにあるサンイシドロ・デ・コロナド市の投票所（小学校構内）で投票する市民。
（2000年，壽里順平撮影）

はじめに

第1章で述べられているように、コスタリカには長い民主主義の歴史がある⁽¹⁾。そういう歴史を経て、現在のコスタリカ国民はどのような民主主義の価値をもっているのかについて本章では考察を試みる。あわせて、最近注目されている発展途上国の中間層という文脈で、中間層はどのような民主主義の価値をもっているのかという点を考察しよう⁽²⁾。

本章の構成は以下のとおりである。第Ⅰ節では、民主主義の価値とは何かを確認するとともに利用するデータを説明する。第Ⅱ節では、データを用いてコスタリカ国民の民主主義の価値を近隣国と比較し、続く第Ⅲ節では、データを上中間層と非上中間層とに分けて、コスタリカにおける階層と民主主義の価値について考察する。

Ⅰ．民主主義の価値とは

民主主義とは、政治的自由が広く保障され、公正な選挙が実施されている状態だと考えることができる。発展途上国における民主主義の形成についてはよく論じられている（恒川 2006）。中南米における民主主義への移行と持続についても分析されており、社会構造論、合理的選択アプローチ、そして構成主義という三つの分析視角があることが示されている（恒川 2008）。このなかで、本章がとくにかかわりをもつのは構成主義（constructivism）の視点である。一般に構成主義とは、あるアクターの行動の要因としてアイデア（観念）、認識、規範やアイデンティティを重視する立場であるが、なかでも構成主義からみる民主主義とは、民主主義アイデンティティもしくは民主主義的価値規範に対する深いコミットメントによってはじめて民主主義体制の長期的持続が可能になると主張する立場である（恒川 2006）。本章では、民主主義へのアイデンティティだけでなく手段としての民主主義をも考えるので、民主主義への人々の考え方について、構成主義に結び

付けられた民主主義アイデンティティという言葉ではなく、より広く民主主義的な価値規範すなわち民主主義の価値という言葉を用いる。

民主主義の価値には理念的なものと実感的なものがある。理念的な価値とは、民主主義をある理由／役割から信じるというものである。これに対して、事後の実感的な価値判断もあるだろう。それは価値というよりは評価と呼んだほうがいいかもしれない。端的に言えば、民主主義に満足しているか不満足かという評価である。われわれは、理念的なものと実感的なものを両方とも数字を使って考察しよう。

民主主義の（事前的な）価値を理論的に整理したのが1998年にノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・セン（Amartya Sen）である。彼は、開発を扱った『自由と経済開発』の第6章「民主主義の重要性」で、わかりやすく民主主義の価値を整理している（Sen 1999）。彼はまず人々が民主主義を大事だと思う三つの方向性を整理している。第一に、生活における民主主義の直接的な重要性である。社会的な参加において政治的な自由を保障する民主主義は非常に重要である。第二に、民主主義という手段としての重要性である。これは、為政者が選挙に直面している場合には、人々の意見に耳を傾けるだろうという論理から導き出される。センが強調した例は、民主主義国では飢餓が起こらないという命題である。すなわち、飢餓が起こりそうになればマスメディアがそれを取り上げ、為政者はそれに応じて対策をとるだろうという論理展開である⁽³⁾。第三にセンは、民主主義の構成主義的な役割を指摘している。これは人々の討論によって新しい（経済的な）必要性を概念として生み出す役割である。たとえば貧困対策として何が必要なのかを考える際には人々の討議が求められると考えてみたらい。

以上の本源的な役割、手段としての役割、そして構成主義的な役割という三つの方向性を、実際のデータで確認するためには概念のさらなる整理が必要になる。本章では、本源的な役割と構成的な役割を集約して「固有の価値」（intrinsic value）とし、手段としての役割を「手段としての価値」（instrumental value）と二つに整理する。このように整理することで、世論調査データを用いながら、ある人が民主主義を支持するのならば、それ

はどういう価値に基づいているのかを一定程度まで実証的に議論することができる。そして、民主主義が長く継続したコスタリカの特徴を、近隣国と比べて明確にしてみよう。

では、上記のような目的から実際の世論調査での質問項目を取り上げてみよう。世論調査としてはラティノバロメトロ調査を用いる。ラティノバロメトロ（Latinobarómetro）とは、民間の非営利団体であり、チリ国サンティアゴ市に本部をおき、1995年からラティノバロメトロ調査を始めている。本調査は、1996年からコスタリカの調査も含んでおり、各国について老若男女1000人程度に対して政治意識を問うている⁽⁴⁾。その目的は、民主主義や経済、ひいては社会の発展について世論調査を用いて調べることにある。そのため、政治意識のみならず経済状況への質問も行われ、中南米の約20カ国について調査が毎年行われており、国際機関や研究者によって広範にその調査結果が用いられている。本調査では民主主義は軍政や権威主義と対置されて用いられている。

本章では、民主主義をめぐる三つの質問に焦点を当てよう。まず、民主主義への満足度である。これは民主主義への事後的な価値／評価にかかわる。ラティノバロメトロ調査での質問と回答項目としては『一般的に、あなたは自分の国の民主主義の状況について、現在、1）とても満足していますか、2）ある程度満足していますか、3）あまり満足していませんか、4）まったく満足していませんか、5）わからない、6）無回答』である。われわれは、この質問に関して、回答者が1）もしくは2）を選んだ場合には、彼（女）は民主主義に満足しているとみなすことにする。この質問は、1996年から2010年まで1999年を除いた14年間にわたって行われている。

つぎに、民主主義への支持に関する質問である。質問と回答項目としては『以下の文のなかで、あなたが同意する意見を一つ選びなさい。1）民主主義はほかのどの政体よりも望ましい、2）ある場合には、権威主義的な政府は民主的な政府よりも望ましい場合がある、3）私にとっては、民主政体でも非民主政体でも同じである、4）わからない、5）無回答』である。われわれは、この質問に関して、回答者が1）を選んだ場合に、彼（女）は民主主義を支持しているとみなすことにする。この質問も、1996

年から2010年まで1999年を除いた14年間にわたって行われている。

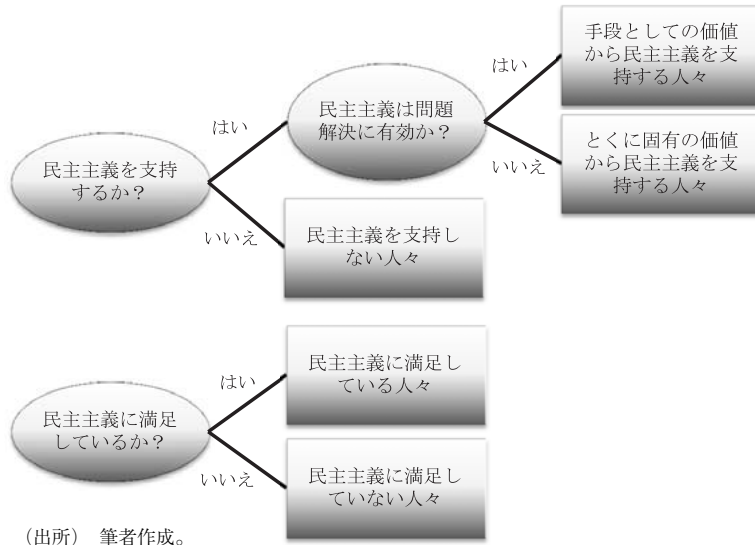
最後に、民主主義の手段としての有効性に関する質問を取り上げよう。質問と回答項目としては『民主主義のおかげでこの国の諸問題が解決されるという人がいます。民主主義は諸問題を解決しないという人も存在します。下記の文のなかで、あなたの考えにもっとも近い考えはどれでしょうか。1) 民主主義は諸問題を解決する, 2) 民主主義は諸問題を解決しない, 3) わからない, 4) 無回答』である。われわれは、この質問に関して、回答者が1)を選んだ場合に、彼(女)は民主主義の手段としての有効性を信じているとみなすことにする。この質問は、2002、2005、2008、2009年の4年間しか実施されず、結果は上記の4年分しか得られていない。

ここで、改めて本章における作業概念を整理しよう。まず、民主主義には事前的な価値と事後的な価値(評価)があるとする。続いて、前者については、固有の価値と手段としての価値に分けることができると考える。固有の価値には、センのいうように民主主義それ自体の重要性を強調する直接的な重要性と、議論を通じて新しい共有価値が形成される重要性があるが、この二つはデータからは当面判断することができないため本章ではまとめて扱う。

この結果、データから判断できるのは、まずは民主主義への支持からわかる事前的な価値、そして、事前的な価値の内訳として、民主主義の問題解決能力への質問結果からわかる「手段としての価値」への人々の信認がわかる。その残余として「固有の価値」からの人々の民主主義への信認を推測することができる。最後に、民主主義への満足度を通じてわかる事後的な価値も把握することができる。

具体的にはラティノバロメトロ調査において行われた質問を使って、民主主義の支持に関する質問と、民主主義の手段としての有効性に関する質問への回答と、すでにふれた理論的な整理を合わせて次の図1のように想定することにする⁽⁵⁾。すなわち、民主主義を支持する層のうち、民主主義は問題解決に有効だと考える者は、手段としての価値から民主主義を支持している人々だと考えよう。これに対して、民主主義を支持する層のうち、民主主義は問題解決に有効ではないと考える者は、とくに固有の価値から

図1 世論調査結果と民主主義の価値



民主主義を支持する人々だと考えることにしよう。また、民主主義に満足しているかの質問から、事後の評価を知ることができる。

世論調査のデータを上記のように整理し、とくに近隣国と比較することで、民主主義が長年持続してきたコスタリカにおける人々の民主主義の価値の特徴を調べることにする。

最後に、コスタリカにおける民主主義の程度を、多数の専門家の判断に基づいておこなったフリーダムハウスの分類に従って中南米諸国との文脈で確認しておこう⁽⁶⁾。中南米諸国では1960年代から1970年代にかけて民主主義政権が激減した。1978年には中南米主要国中、民主主義体制の国はわずか4カ国（コスタリカ、コロンビア、ドミニカ共和国、ベネズエラ）にすぎなかった。ここからわかることは、近隣国に比べて、コスタリカでは民主主義体制が持続的に維持されているということである。

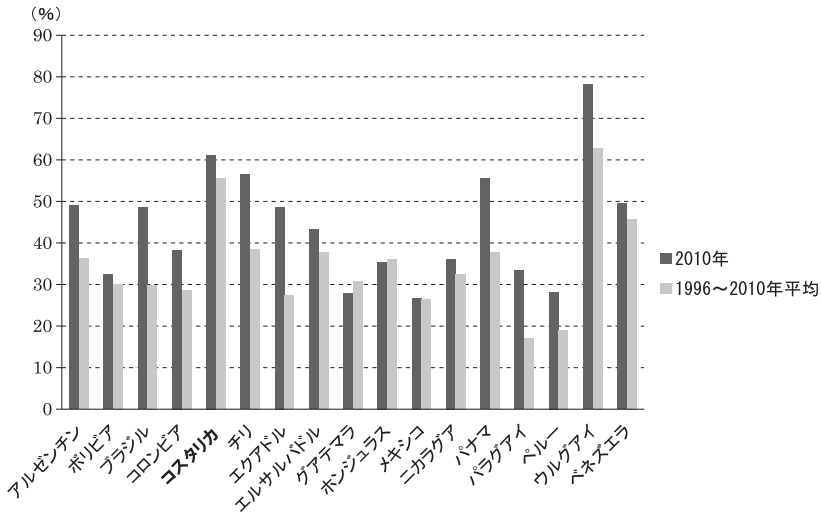
Ⅱ. コスタリカ国民の民主主義の価値判断

——近隣国との比較——

まずはコスタリカの人々の民主主義への満足度（民主主義の事後評価）を中南米諸国と比べてみよう。

図2は、満足している人々の数をそれぞれの国の回答者数で除した比率である。最新年の2010年のデータと1996～2010年の平均を示した。ここからわかることは、コスタリカで民主主義に満足している人々の割合は2010年においても、また1996～2010年の平均においてもウルグアイに次いで高いということである。コスタリカでは2010年において61パーセントの人々、1996～2010年平均で56パーセントの人々が民主主義に満足していた。これは、近隣国であるメキシコや中米諸国と比べるとその違いは顕著である。コスタリカの人々は近隣国の人々に比べると民主主義への満足感を示している人々が多いということがわかる。

図2 民主主義への満足度

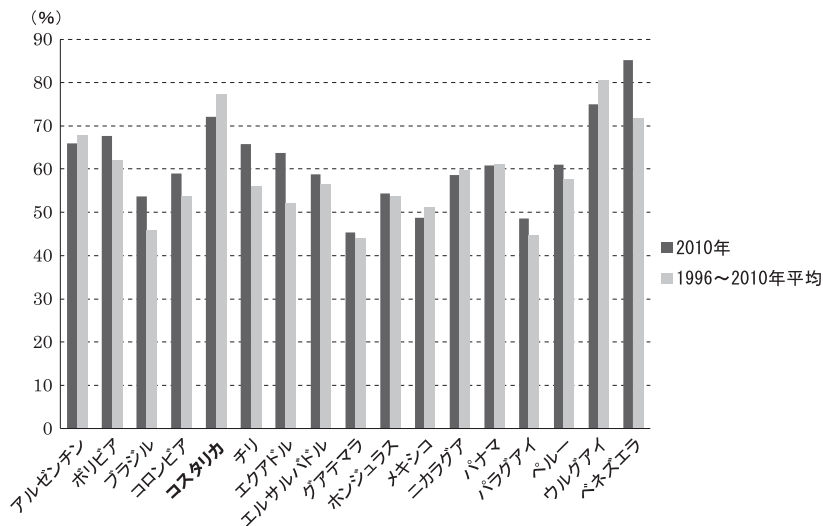


（出所） 各年のラティノバロメトロ調査をもとに筆者作成。

つぎに前節で示した民主主義の支持を近隣国と比べよう。

図3は前節で示した方法によって民主主義への支持を表明した人々をそれぞれの国の全回答者に占める割合で示したものである。この指標においても、コスタリカの数値は高い。2010年において72パーセントの人々、1996～2010年平均では77パーセントの人々が民主主義を支持している。これは、中南米諸国のなかでは2010年ではベネズエラ、ウルグアイに次いで3位、1996～2010年平均ではウルグアイに次いで2位である。近隣国であるメキシコや中米各国と比べても民主主義への支持が高いことがわかる。

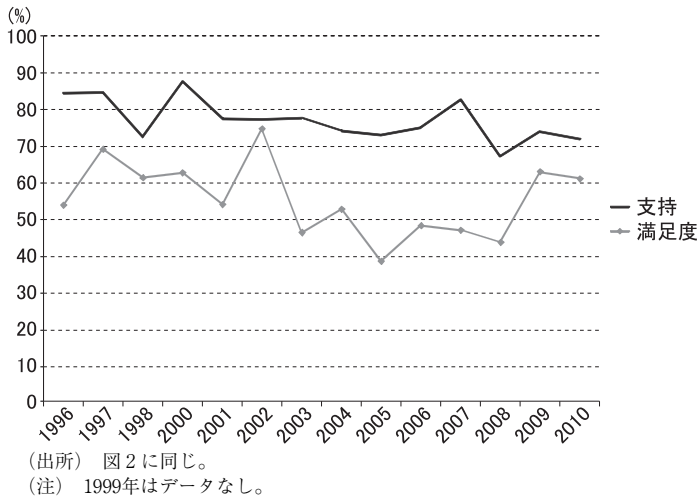
図3 民主主義への支持



(出所) 図2に同じ。

それでは、コスタリカ国民による民主主義への価値判断の時系列的な動きを確認しよう。図4は1996年から2010年までの満足度と支持を表したものである。確認できることは三点である。第一に、満足度は一時的に40パーセントを割り込む(2005年)時もあったが近年は60パーセント台になっている。第二に、支持については近年は70パーセントであるが、過去には80パーセントを超える年も存在した。そして、わずかに下降傾向がみられる。

図4 コスタリカ国民の民主主義への価値判断

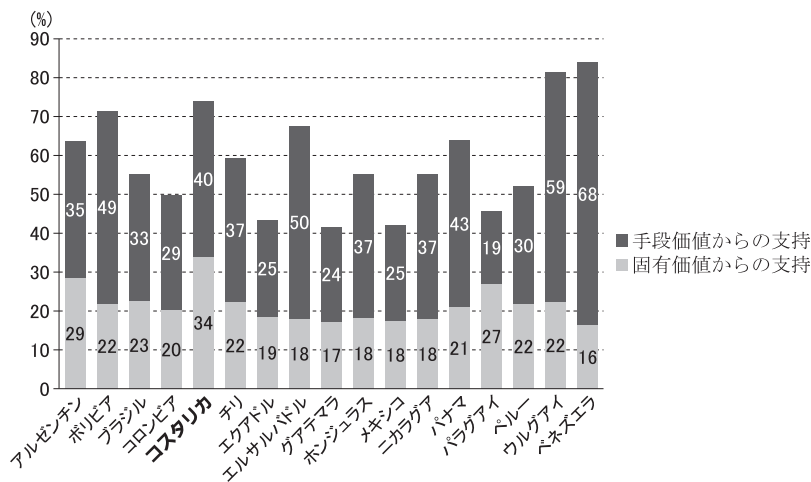


第三に、支持する国民の割合は、いずれの年も満足する国民の割合を超えている。そして、満足度の振れ幅のほうが、支持の振れ幅よりも大きい。つまり、コスタリカの人々の民主主義への支持は持続的なものであることが示唆される。

では、コスタリカの人々はどのような理由で民主主義を支持しているのだろうか。それは、民主主義は何かに役立つという「手段としての価値」からなのだろうか。それとも、それ以外の「固有の価値」からなのだろうか。

図5は前節図1に示した方法によって、民主主義の支持と民主主義の価値を組み合わせて、どのような理由から民主主義を支持しているかをとらえようとした試みである。2009年のデータをもとに、民主主義を支持する人々のなかで、民主主義は問題を解決すると答えた人々を「手段価値からの支持」、そう答えなかった人々を「固有価値からの支持」としたものである。図5からわかることは、コスタリカの人々のなかで「民主主義が問題を解決する」とは思っていないが民主主義を支持する人々が多いということである。コスタリカでは34パーセントの人々が固有の価値から民主主義を支持しており、手段としての価値から民主主義を支持する人々は40パーセン

図5 民主主義への支持と民主主義の価値



(出所) 2009年ラティノバロメトロ調査をもとに筆者作成。

トである。これは他の高支持の国々、たとえばベネズエラ、ウルグアイやボリビアと比べると違いが顕著である。ベネズエラでは全体の16パーセントの人だけが、固有の価値から民主主義を支持しており、68パーセントの人々が手段としての価値から民主主義を支持している。

興味深いことに、民主主義への支持が高く、そして、固有の価値から民主主義を支持する人々が多い国としてコスタリカのほかに、アルゼンチンを挙げることができる。アルゼンチンは多くの軍政期を経験し、長い民主主義の歴史をもつコスタリカとは明らかに異なっている。なぜアルゼンチンでそうなのかについては、今後の課題としたい。

コスタリカにおける民主主義の価値判断の現状は、以下の三点のようにまとめられる。第一に、コスタリカで民主主義に満足する人々が多い。コスタリカでは2010年において61パーセントの人々、1996～2010年平均において56パーセントの人々が民主主義に満足していた。ちなみに、中南米17カ国平均では2010年で44パーセント、1996～2010年平均では35パーセントであった。第二に、コスタリカでは民主主義を支持する人々も多い。2010年において72パーセントの人々、1996～2010年平均では77パーセントの人々

が民主主義を支持している。ちなみに、中南米17カ国平均では2010年で61パーセント、1996～2010年平均では58パーセントであった。第三に、コスタリカでは固有の価値から民主主義を支持する人たちが他国と比べると多い。2009年において全体の34パーセントが固有の価値から民主主義を支持している。ちなみに、中南米17カ国の平均は22パーセントである。

上記の事実から、コスタリカでは「固有の価値」からの民主主義への支持が高いという結論が導かれる。人々は民主主義をなぜ支持するのか。満足しているから支持するかもしれない。しかし、なぜ満足しているのか。やはり、問題を解決するという「手段としての価値」か、それ以外の「固有の価値」に理由を求めるほかはないだろう。

Ⅲ. コスタリカ中間層は国民一般と異なっているのか

しばしば一国の中間層が民主主義の深化もしくは民主化に果たす役割が指摘されている。たとえば、古くは Lipset (1959), そして Huntington (1991) のように、経済成長によって中間層が拡大し、その中間層が主導する勢力として民主化を促進するという議論がなされている。この仮説が正しいかそうではないかを実証する前に、まず一国の中間層の民主主義の価値が、他の人々とどのように異なっている、もしくは同じかをみることは興味深いだろう。

まず、中間層とはどういう人々のことかを簡単に考えよう。Ravallion (2010) や Loayza, Rigolini, and Llorente (2012) に沿って二つの概念を考える。一つは、先進国でもっとも普通な考え方であり、所得分配の真ん中あたりの人々を想定する考え方である。もう一つの方法は、より発展途上国で多く使われる考え方であり、ある国で貧困線（所得や消費額において貧困層の境を定めた金額）より十分に上の暮らしをしている人々のまとまりを指す。前者の考え方と整合的に考えれば、「貧困線より十分に上の暮らしをしている人々のまとまり」は「中間層」ではなく、「上中間層」と考えられる。

ラティノバロメトロ調査では主観的な所得を尋ねている。すなわち、質問と回答項目としては『あなたが受け取る給料とあなたの家族全体の所得は、あなたの必要を十分に満たしますか。あなたの状況を表した以下の記述を選びなさい。1) 十分であり貯蓄できる, 2) ちょうど十分であり大きな問題はない, 3) 十分でないし, 問題がある, 4) 十分ではないし, 大きな問題がある』である。われわれは、回答者が1) を答えた場合には上中間層①とし、2) と答えた場合には上中間層②と考え、それ以外は非上中間層と考えよう。おそらく、上層は貯蓄ができる上中間層①の一部分と考えられるので、中間層の行動は上中間層①よりも、上中間層②に顕著にみられることが想定できる。すなわち、中間層の価値がより明確に現われると想定される上中間層②の結果が、上中間層①や非上中間層の結果と大きく異なるかに焦点を当てよう。2009年の調査では、1) と答えた人数は116人、2) と答えた人数は456人、合計では572人（総数1000人）であり、6割弱ということになる。結果は表1に示した。

まず、民主主義への満足度である。上中間層①は63パーセント、上中間層②は66パーセント、非上中間層は60パーセントが民主主義に満足であると答えている。若干、上中間層②に民主主義への満足度を示す人々が多いことがわかる。

つぎに、民主主義への支持である。上中間層①は73パーセント、上中間層②は74パーセントが民主主義を支持すると答えており、その比率はほとんど変わらない。非上中間層では65パーセントである。民主主義への支持は非上中間層より上中間層のほうが多いことがわかるが、上層が含まれるであろう上中間層①と、そうではない上中間層②の違いはほとんどない。

では、民主主義への支持の理由をみよう。上中間層①では、民主主義を支持する85人のうち45人が民主主義は問題を解決すると答え、問題を解決しないと答えたのは40人である。上中間層①総数（116人）を分母にとった比率でみると、「手段としての価値」で民主主義を支持する人々は39パーセントであり、「固有の価値」で民主主義を支持する人々は34パーセントであり、合わせて73パーセントになる。

上中間層②は、民主主義を支持する336人のうち201人が民主主義は問題

を解決すると答え、問題を解決しないと答えたのは135人である。上中間層②総数（456人）を分母にとった比率でみると、「手段としての価値」で民主主義を支持する人々は44パーセントであり、「固有の価値」で民主主義を支持する人々は30パーセント、合わせて74パーセントになる。固有の価値から民主主義を支持する人の割合が、上中間層①よりやや低いことが特徴である。

これに対して、民主主義を支持する非上中間層278人のうち、民主主義は問題を解決すると答えたのは146人、問題を解決しないと答えたのが132人である。非上中間層総数（428人）を分母にとった比率でみると、「手段としての価値」で民主主義を支持する非上中間層は34パーセントであり、「固有の価値」で民主主義を支持する非上中間層は31パーセントである。興味深いことにより中間層の価値をより反映していると想定される上中間層②に対して非上中間層を比べると「固有の価値」から民主主義を支持する割合がほぼ同じであり、「手段としての価値」で民主主義を支持する割合が上中間層②において大きいことがわかる。

表1 コスタリカ上中間層と非上中間層の民主主義への価値判断

(人, カッコ内は%)

階層	民主主義への 満足度	民主主義への支持		
		総数	手段としての 価値	固有の価値
上中間層① 116	73 (63)	85 (73)	45 (39)	40 (34)
上中間層② 456	299 (66)	336 (74)	201 (44)	135 (30)
非上中間層 428	257 (60)	278 (65)	146 (34)	132 (31)

(出所) 図5に同じ。

(注) パーセント表示の母数は上中間層①や②の総数もしくは非上中間層総数。

以上の考察から三点をまとめることができる。第一に、コスタリカでは、民主主義の満足度では上中間層も非上中間層も満足している割合が大きく、満足している人々の割合は上中間層が若干大きい、さほど変わらない。第二に、民主主義の支持においては、上中間層のほうが非上中間層に比べて支持する人の割合が高い。そして、中間層に顕著な特徴は「手段として

の価値」からの支持である。逆にいえば、「固有の価値」は中間層でもそうでなくてもその割合はあまり変わらない。第三に、前節で述べたようにコスタリカの民主主義の価値の特徴は、その「固有の価値」の高さにあり、それは上中間層に限ったものではなく非上中間層にも広がる、いわば階層を超えたものである。

おわりに

本章は次の三点からまとめることができる。第一に、コスタリカでは中南米諸国と比べて民主主義の満足度でも民主主義の支持でも高い比率を示している。まさに、民主主義について中南米有数の高い価値をもった国といえるであろう。国民の5割強が民主主義に満足し、8割近くが民主主義を支持している。

第二に、コスタリカの民主主義の質の特徴は、その民主主義を支持する理由にある。民主主義を支持する理由は、一般には大きく分けて二つを考えることができる。一つは、民主主義は何か問題を解決するから賛成するという、すなわち「手段としての価値」である。もう一つは、民主主義そのものが尊重すべきもの、もしくは、民主主義のもとでの討議によって新しい価値が共有されるということ自体に価値をおく、「固有の価値」である。コスタリカ国民の民主主義の支持の半分近くは「固有の価値」からの支持であることがわかった。

第三に、コスタリカの民主主義の価値を特徴づける「固有の価値」からの支持は、中間層に限ったものではなく、広く国民全体に通底するものであることがわかった。

本章の冒頭で、コスタリカの長い民主主義の歴史のなかで、コスタリカ国民はどのような民主主義の価値をもっているのかという質問を提示した。この質問に端的に答えるならば、生活に余裕のある上中間層を超えて国民に広がった民主主義の「固有の価値」こそがコスタリカ民主主義の特徴であるといってよいだろう。

【注】

- (1) 本章では権威主義ではなく、国民に政治的自由があり公正な選挙が行われているという意味で民主主義（デモクラシー）という用語を用いる。この点は、後述するラティノバロメトロ調査と整合的である。
- (2) たとえば、『アジア研ワールド・トレンド』（204）2012年9月号「特集：イメージと実態の中間層」を参照せよ。
- (3) ここで民主主義の「手段としての価値」と中南米諸国で最初（20世紀中頃）に大衆民主主義をめざしたポピュリズムとの関係を議論しておく。ポピュリズムの特徴は恒川（2008）に従って次の5点にまとめることができる。第一、階級協調路線をとったこと、第二、支持基盤である「人民諸階級」に経済的・政治的利益をもたらそうとしたこと、第三、工業化を意識的にめざしたこと、第四、文化的ナショナリズムの傾向があったこと、第五、政府の積極的な介入を容認したことである。ポピュリズムが民主主義の枠内で行われた時にはその第二点が「手段としての価値」でクローズアップされる。為政者（ポピュリスト）が「人民諸階級」に経済的・政治的利益をもたらす体制がポピュリズムの一面であった。この意味で、民主主義の「手段としての価値」とポピュリズムにはある程度の親和性があるといえよう。
- (4) 本調査の個票は <http://www.latinobarometro.org/> からダウンロードすることができる。
- (5) 本章では簡略化した整理を行った。より詳しい説明は久松（2012）を参照されたい。
- (6) フリーダムハウスは各国で政治的権利と市民的権利が遵守されている度合いをそれぞれ1～7の数値（1に近いほど権利遵守度が高い）で測り、1～2.5の国を「自由」、3～5を「部分的に自由」、5.5～7を「不自由」としている。ここでは、恒川（2008）に倣って政治的権利度と市民的権利度の平均をとって、1～2.5を「民主主義体制」、3～4.5を「半権威主義体制」、5～7を「権威主義体制」として扱った。

〔参考文献〕

<日本語文献>

- 恒川恵市編 2006.『民主主義アイデンティティ——新興デモクラシーの形成——』早稲田大学出版部。
- 恒川恵市 2008.『比較政治——中南米——』放送大学教育振興会。
- 久松佳彰 2012.「コスタリカにおける民主主義の価値——ラティノバロメトロ調査に基づいた記述統計——」（山岡加奈子編「コスタリカ総合研究序説」調査研究報告書 アジア経済研究所 41-62 http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Download/Report/2011/2011_412.html）。

<外国語文献>

- Huntington, Samuel P. 1991. *The Third Wave: Democratization in the Late Twentieth*

- Century*. Norman: University of Oklahoma Press (坪郷實・中道寿一・藪野祐三訳『第三の波—20世紀後半の民主化—』三嶺書房 1995年).
- Lipset, Seymour M. 1959. *Political Man: The Social Bases of Politics*, Garden City. New York: Doubleday & Co. (内山秀夫訳『政治のなかの人間』東京創元新社 1963年).
- Loayza, Norman, Jamele Rigolini, and Gonzalo Llorente, 2012. “Do Middle Classes Bring about Institutional Reforms ?” *Economics Letters* 116(3): 440-444.
- Ravallion, Martin 2010. “The Developing World’s Bulging (but Vulnerable) Middle Class” *World Development* 38(4): 445-454.
- Sen, Amartya 1999. *Development as Freedom*. New York: Anchor Books (石塚雅彦訳『自由と経済開発』日本経済新聞社 2000年).

<ウェブサイト>

Latinobarómetro, data files 1996-2010 (<http://www.latinobarometro.org/>).